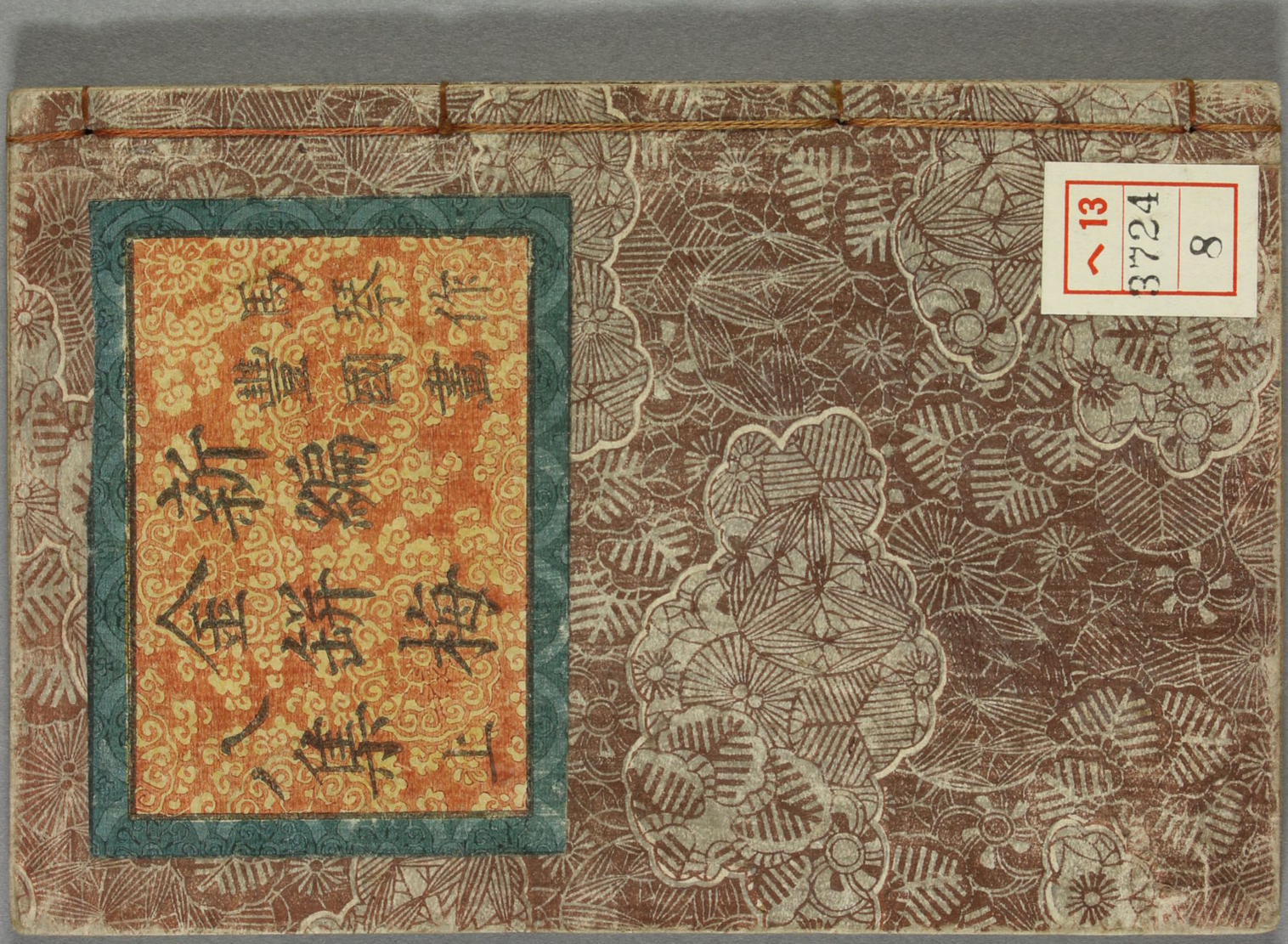


13
3724
8

門へ13
號3724
8

馬琴作

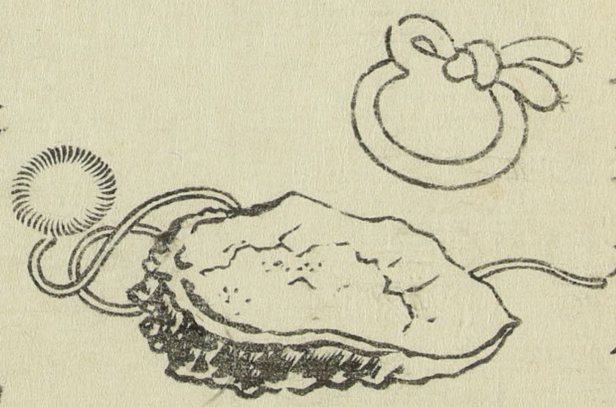
新編金瓶梅第八集

上帙

國貞画

天保十有二年
辛丑孟春發行

江戸芝神明前三嶋町
甘泉堂和泉屋市兵衛

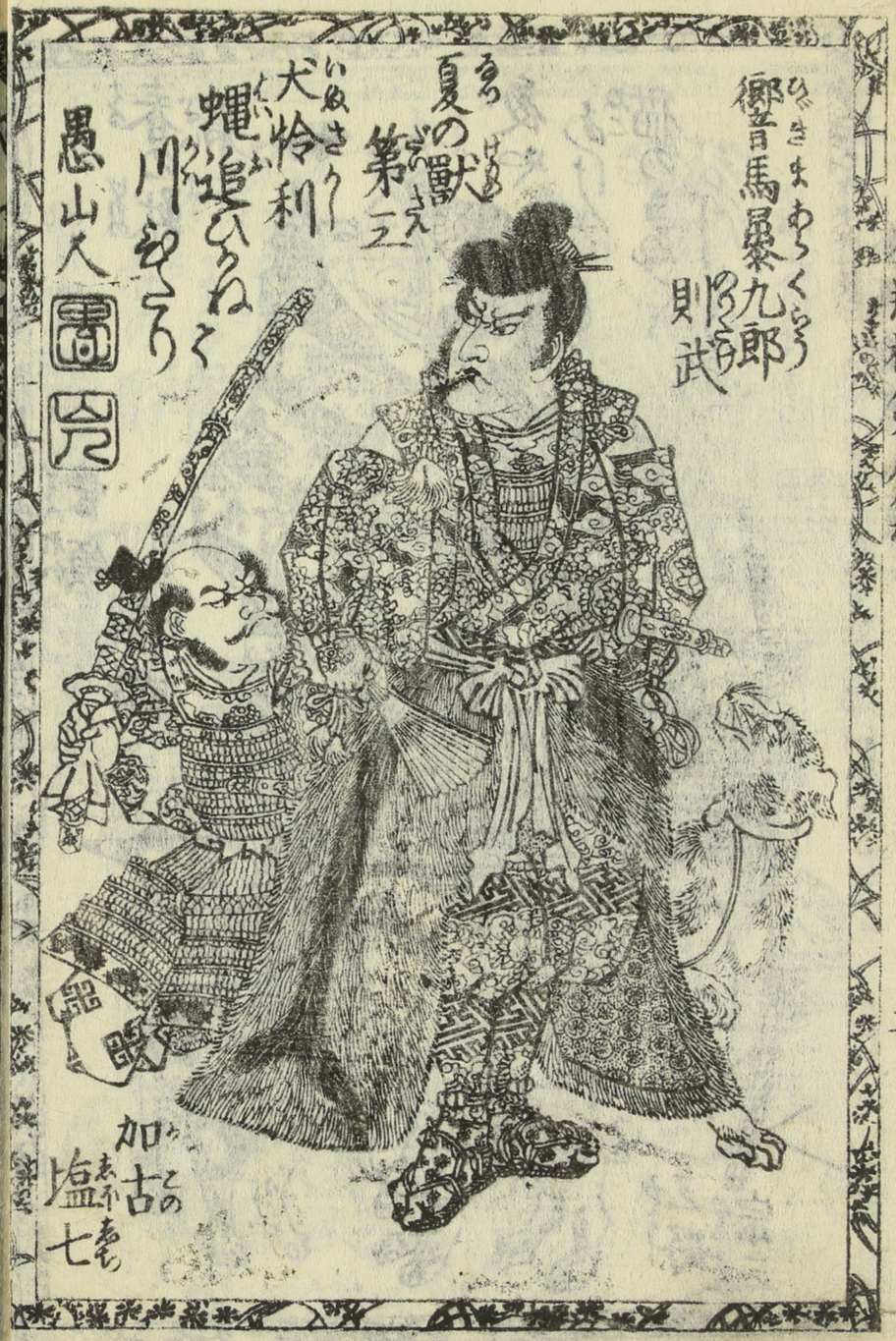


若夫人の賢不肖と善悪邪正を知まく欲さば蠶と蜘蛛の紡ひを見よく是を思ふにあくいなし。蓋蠶は絲を吐れ、蜘蛛も亦絲を吐く。其蛛の物異ならねども蠶は絲に作り綿に為り絹に成ぬ。綾羅錦繡の愛しきもこの物なければ製ることを得ず。其人に益あるも蠶と為るに及びてハ則其卵を送せり。便是身を殺して仁を為す者に度かり。又蜘蛛の紡ふ所其絲をもて網に作りて小虫を係て啖ふのミ。然ば大厦高樓の檐も竹垣に離色の垣なるも久しく帚せざるときハ此が為に汚されて其本色を失へり。倘膳中に入るときハ人を殺さの大毒あり。任れば其の策子に見りしる武松琴柱は蠶に似て阿蓮啓口は蜘蛛ゆゑ如ざる因果覿面の理りハ這第八集に具に何と小児輩がてん欲く。

天保十二年辛丑春正月吉日　曲亭馬琴識

春の獣
第一
総角は
竹に手綱や
春の駒
鷲齋
三好
海雲
晴元

春の獣
第二
夜や
あけん
猫のきぬく
信天翁
管領
高國
三好
宗三



響馬暴九郎
則武
夏の獸
第三
犬怜利
蠅追ひなぬて
川ゑたり
愚山人
加古
塩七

夏の獸第四
水を出て涼む
葦鹿の晝寢哉
蓑笠漁隱
玉村
彈八
則高
勇魚
守平

則武の妻
薊前
秋の獸
第五
牝や呼ぶ鹿山も
色乃世むらもまぢ
狂齋
艱娘 葦良比

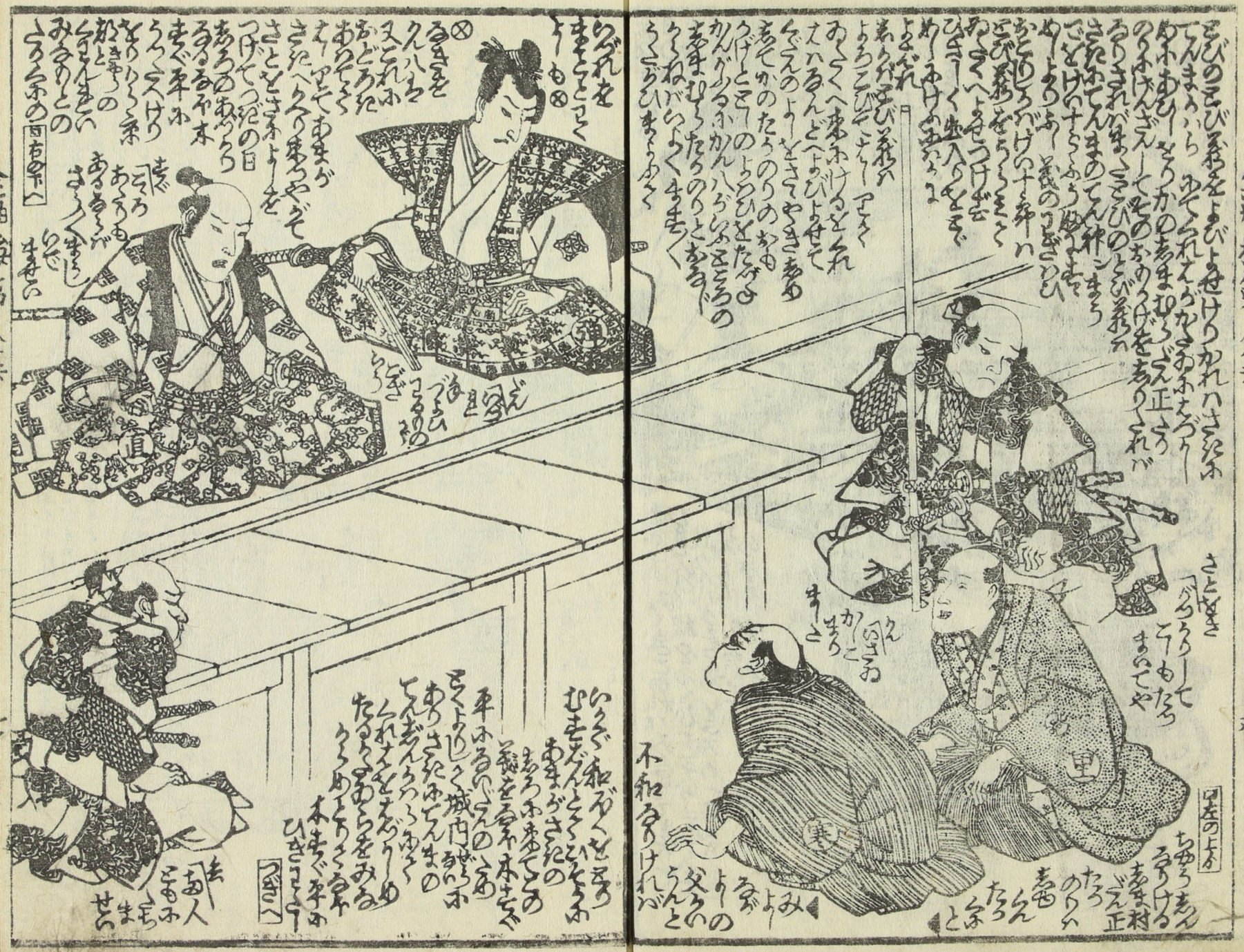
春へ越
人清し
冬の獸
第六
西海の
惡龍王
多羅
阿伽
逆潮笑鮫
半岡人
せぬ
けの店

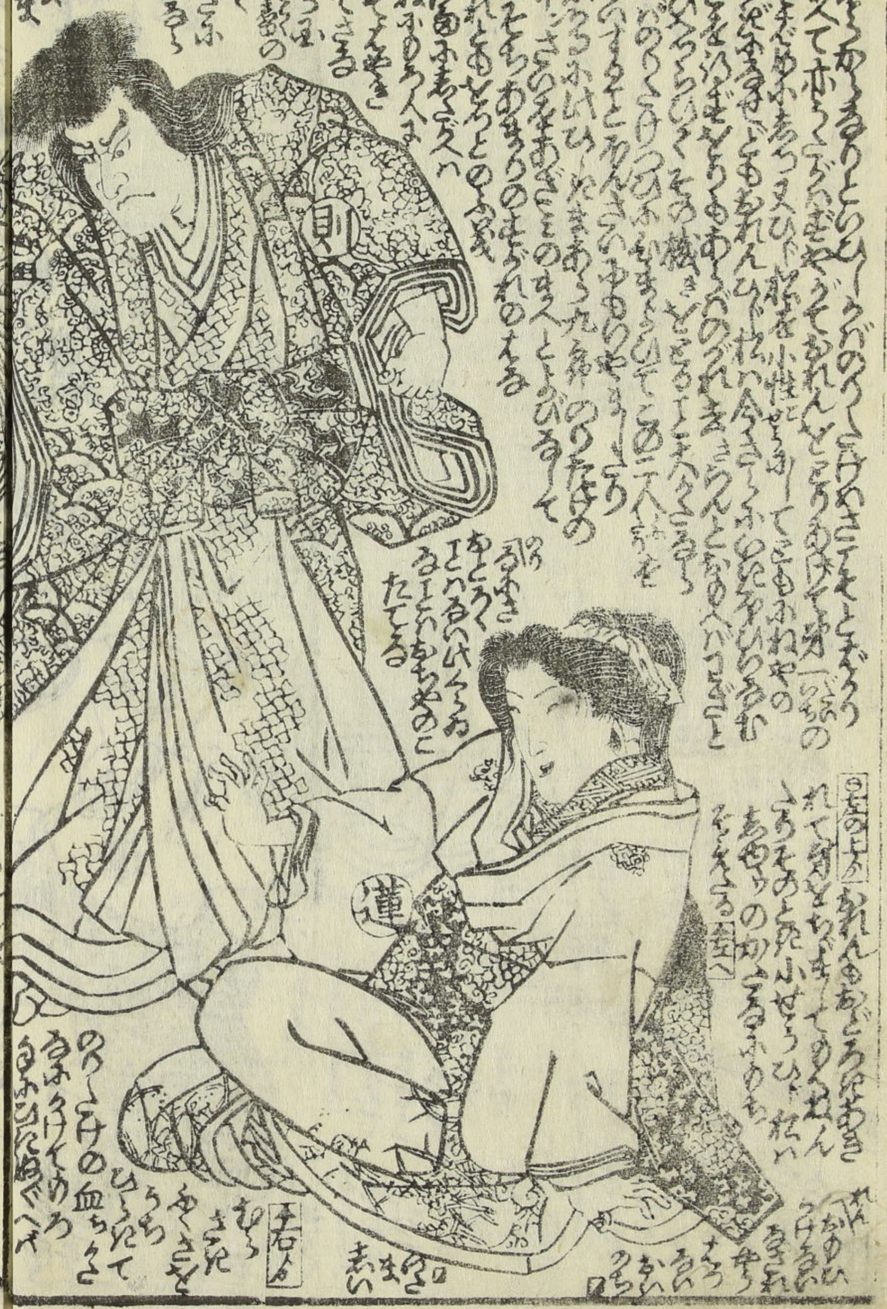
さてもそのち西かどをはけくすらぶ
あまやがさなどの出さまのあれこれの人ン
かへんおひやうばうなくつくもの
されてるおひのあそうそうもまふ
けまでおれんひ松ばかり日ぐろ
あのをこそふ入うかがうものひの
きかさまでーせおうねを
こうしてうあるみてこうふ
あうこれかんへくもんやい
かうふねえおこそのだもも
まだねらとそもかまをんひ
私をまうこもでさひくせさく
まあるかどぐまありひうけられみ
せどぐちかまうそをうかうみてのそこら
れまうくとうぐうりそこへうりくらもあひ
ーけくあ後せんようひくとこうこれば
さまうそれのひ松れんもこれいとそうう
おどうのおこれてまどちぐもせそあうそも
えをそのう中かんへもそるくとうその入来端
のあさいをたの旦あれんひ松ばつこみのもの
ひをうやうくとうろまれば人んちろ
うみづまくさもあうんくこれいあかと
そえんまといかけのきろうのうまき村じえんぱ
たらのりこれうちうえうまふかのばけんと
きこえーかくなけのすらぐばんか

（右の上）

ちうともうそをきこうかそ且ふそのおこうひ
ありとの世のそうぶえんかんうけまぐび
番くんろうまんのれるえいなうけのうり
ひとうれえの地へありかたこそのきよ
ぎうをまもの今ーは世のそうぶえよ
ちうともたうつまりんかやえ
こんおまえんひねとそ
うんぐうこうさくこそのの
ありかれけのすう
ふもかやまうて
あうされうこ
きうくんうぶえ
ままぐ人ちり
男女ぬあ
人いあまさたの
まろへひたひり
四まてくさひく
つるだくこうのえせん
くんふうひふねぐい
らもーくこえうひふねぐい
ねどもそのちふ
けの十神とうりよ
りのぐくこをを
たぐさうまぐこのくまう
あうくまうの今ぬうえ

（右の下）


つぎへ

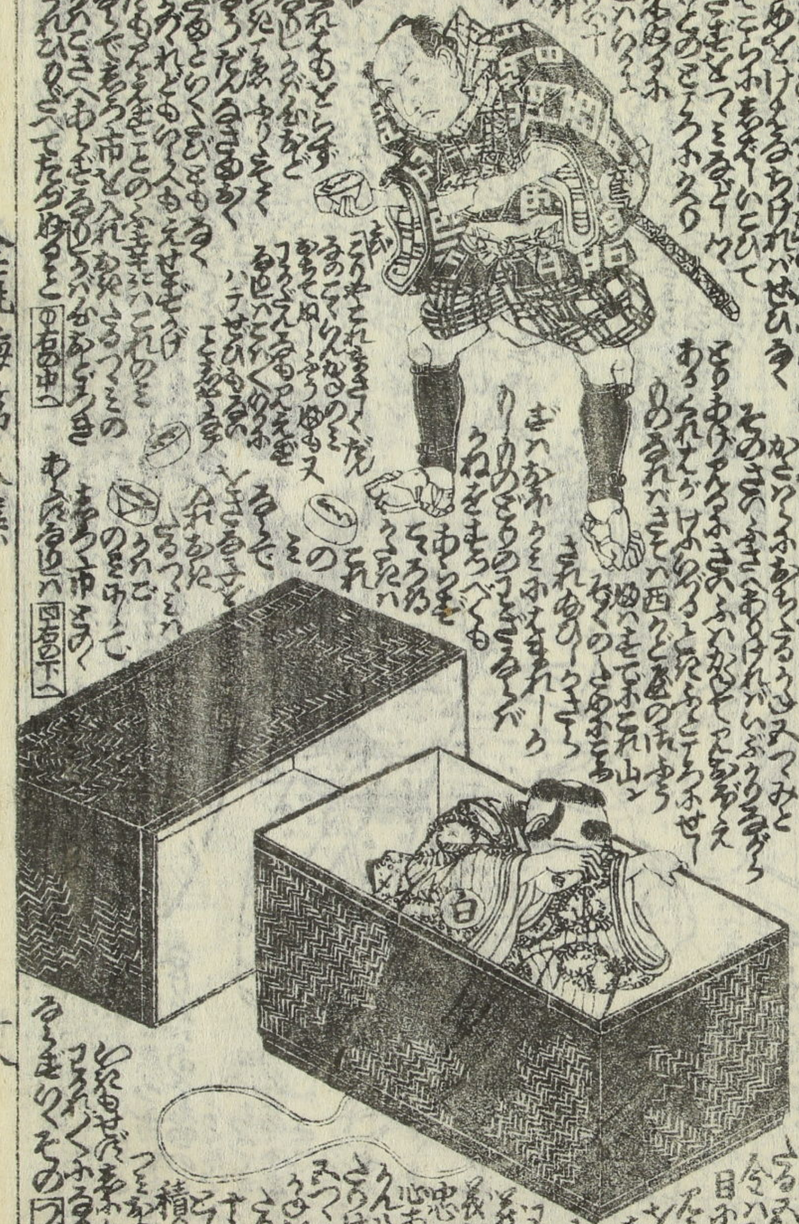


つてまわりの四まわりうつて
りえんがけりてこのるぎへ
これのこるまでかめるみ
こへまくおつれてひさりの
あをこぢまつうべあるもと
さけびてまこびねまなさ
赤るひるみの四
のつまであう人み
ちかりそ小
ひんくまをのつく
やられてうまれも
けうさされいのちの
すけれやいとをを
こへ人なくねまの
びてまりまそう
月下とまも八み
あがまつ紀へ
かつくーてやく
ゆへ由あまま
みけのひけり
こる祝ふこべへ
けのすつをせなひろ
これんひこへうむんとそ
さてのひくてこおりひとるふ
そのやくまつちいみよの

日いれけり
かるとそろ
このひとうるる
野武士原山そく
らがちへ人を
えんとそ山の
上下ろまるよう
らくうろう
おちちくそちて
うちうそ来
んべたをあきさ
えーんがこひ祈
かてへうるり
まるりもやま鳴の松
うびふけのすらとえうんごとうちなろ
まそくれすふこれをうちまめくそ
とうふさーうたんびうらのめこを次へ

大ぐんまの鳴をおよせ
来ゆるといへい西のくうう
まさぐりえ又みめこのくう
これいるまみはこれをみこうとも
のうとも小大軍まそふあ
ひうーのうさへもおおうつ紀来ゆるとりへ
鳴へのれまりてことのまぐまる「群集ぜんやまと
とまあんをまつけのすらあもこれえやもりよ
ふそくぐんまあろ市いすごりて
かりけんがせあひーもりのちかりりてこと
十まあはのくう原下どふりくへまみちふうち
あうむうそびろこれをみこうてくていのつ
れさうさかうんとまのひつりおうとうろふ
までふーて小へさかぎうりけ来ろ人もそで
うびやがてみちのりうけのすらとうちあ
るくまろ市ことまろあぐさまりてうちる大普
ぬんをみるとうまそてくさて又ろ市とまろこち
つこのつのでくうをちうふあて又ろ市とまろこち
そうへふうちのせそやとせあひあるふ五十を
ちふあまるこがろれよも人よまでれてやね今
たくまりくちうるふあまるあれがるもふを
りめまもまこぐれえをたすけまこて
くやまそれけまこーかるふまでふて

寒
冷


白

難苦くんとうこるるべーあずーとえさてあたつ
さるわどふんハあひやいあるのとこうろうあろ
市とかさみがわりふせあひるとちやみとみそきて
ひくれすでよ夜いあけこれとやふるけれバ一ちろえの
ひくれなどもんがてくてよでふうえおのそうろうを
市へいとあるりくべてんとそうちうくを
あろれバいのくるたさけぶふ
せんくともろう困ゑーえてく
ゑれんくちのろこうふいとと
りバくろくさのやりありあさ
あれにそぢろうのあまま法れかろ
ゆそおろろふりいま来ろこうろうやと
せんにてありしろがんハるやいやむ
こをゆそのいりふ立ちろて
あるのあまはつこうろうれくい
うあいろまたかあれろう
のれてこてあそまけんとも改
用もえたびてこもみろこう
ぞくふうそひそれてうあふ
のそめどもせうこ色これくやう角
こそれろくまれひとこるうろそうろ
うくいふんくろでのかいのあまりも
あくがちとこうそもあひとお着
るくをおまうちきてえハ
きのぞくるることそ色ひとうふ
るるこう月あればあれのふい
おれうねともるれちとざうふおふんう
まくくこるさへ入うもへとうとれんだふおあく

ひきハおそとろうえて
まさくしのみろうよ
あこるりえまそまろそ
ひくれ
ひくれ

さあでうん八おひやもろ市らふせづけらをを
んあせうがこそろんのをたるあちーてあぞ
らくとをるみどふんへたくこがとうく
ろうそびのこををのべてあんまあ又
つぐうこれくいるろくまうれバがとうあと
たろあんろあり
うれも服用を
うこうろくれいをこ
ちでもたうぐこ
うこうのふいやうかのの
ろうおまうけさん
あのひとうこでいへ
どもあちとこてのに
あをてんいろそせふ
まそのんなそしのハ
らバそを服用ゆ
ろらへあて今をその
てとふうる日ふ十
なをゆーて北まあこ
ゆひうとあをうけく
きてつうるつをてつうん
そそも世すてひとれバたくハへるおきゆ
るうねともうをあろあるバちとんありてん
されバとてこのをさこうみをんちふおうて
なのおせんというろんハちゃらいるえかふくと
みてこうんてやおそうんをうろけてうりのくさ
みまあろ市とのこーそ

[つづき]あまがさねへおよせみよのあろしをせゆうふ
恨話の敵人かんろうろの木
せきく手この余ろ
らをあせてろをたくく
どもよ舟ていたせいろけんへ
ひたやひまいまろべもおろぎ
まのろうべもおろぎ
ろう

の右の
ある日
あめ月の
くろこふ
まぎれて城の
土卒引へこるあち
うせてこの地ふてたの

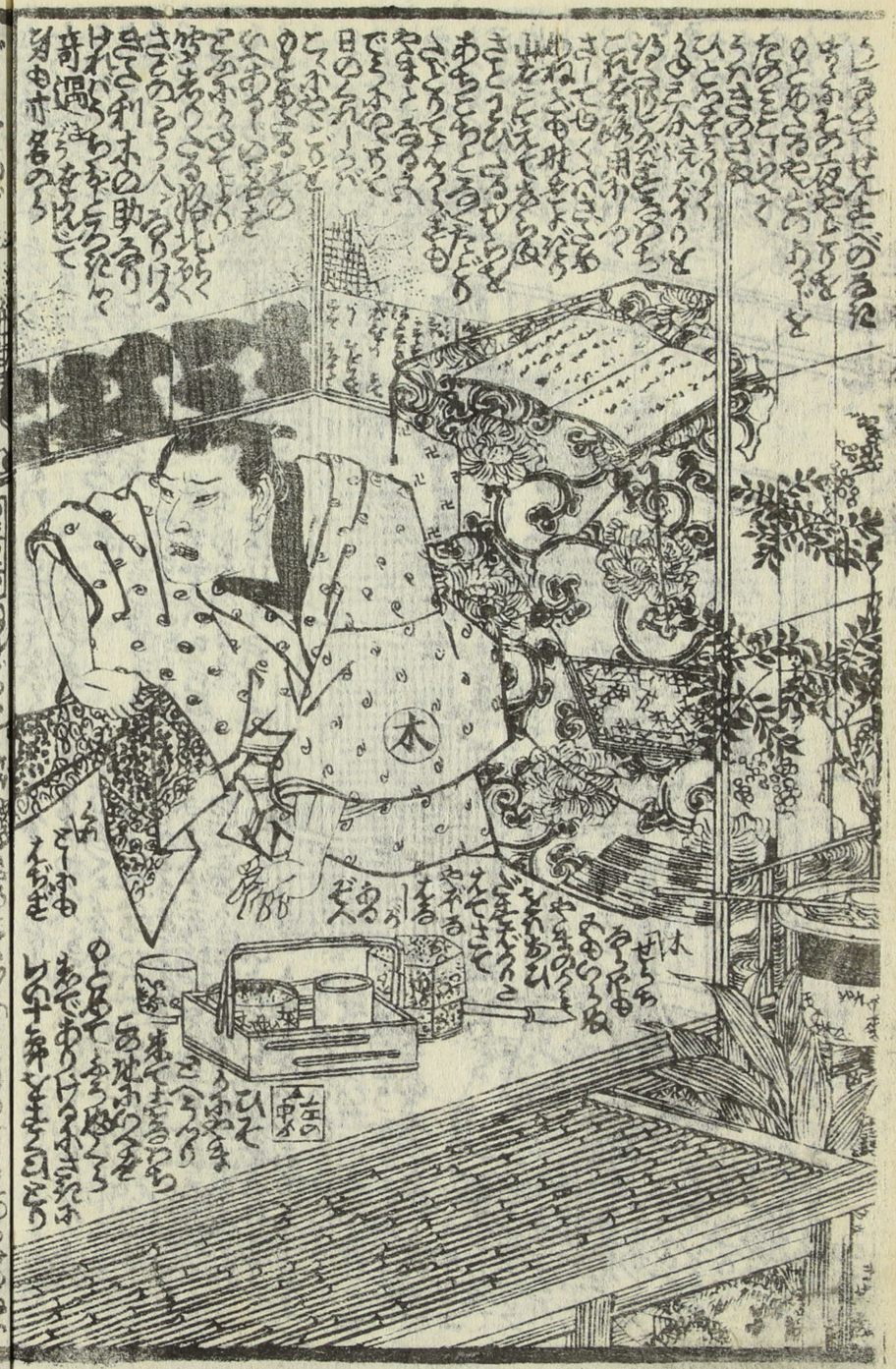
の左へ

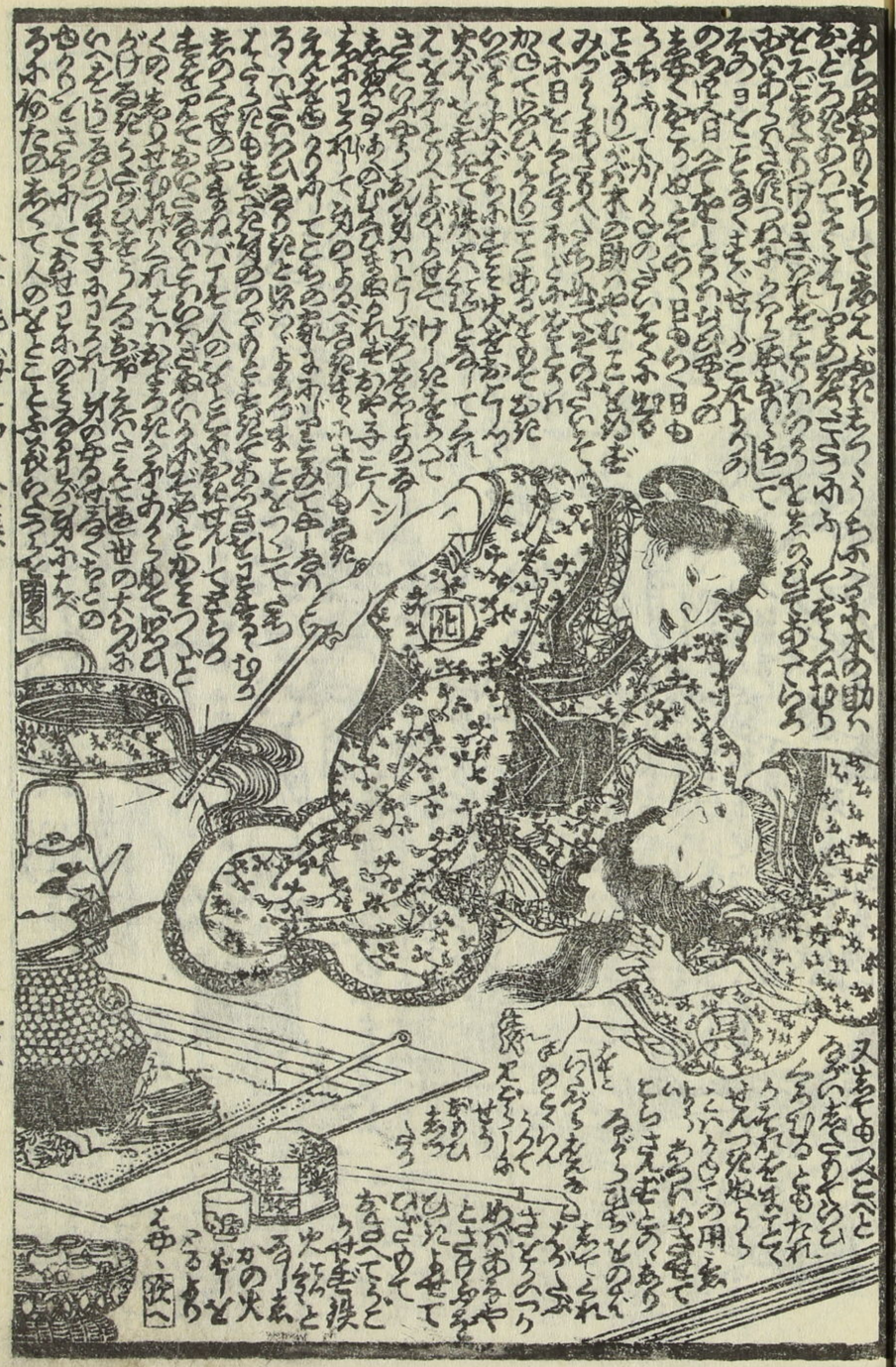
ゆらぞろ
つたの日みよ
ろのさろひふ
よろとさこんろうたろふやげかけりろて
さろひのやとりもそたろひ一戦ろせんふ
うちまろてそるふとふこうさろ
そ自ろいてろ
ちろほろりける
のろろふ百ろまろを
ちろへてひだなのろけとろまも
陣のまるえ物ろのろふありそ
けりてたろふそえの大軍とえのなを
士卒ろうちまろかしてろをたろのろ
もみろうちまかしてろをたろのろ
ありそふさろすまさのろるかろさへまのまへ
ろうよとおりろろうへえぶふとさび
入りくそこの水ろろふりかけるされが
つひふこのうちのかふとろりくそのろ
甲ろ人のありてあろそのくちやまを
なんのうろる平家がふとねろり
世ふこれをまま村ふとひろりそれ
これそのとのとろまさられたへ
ろ

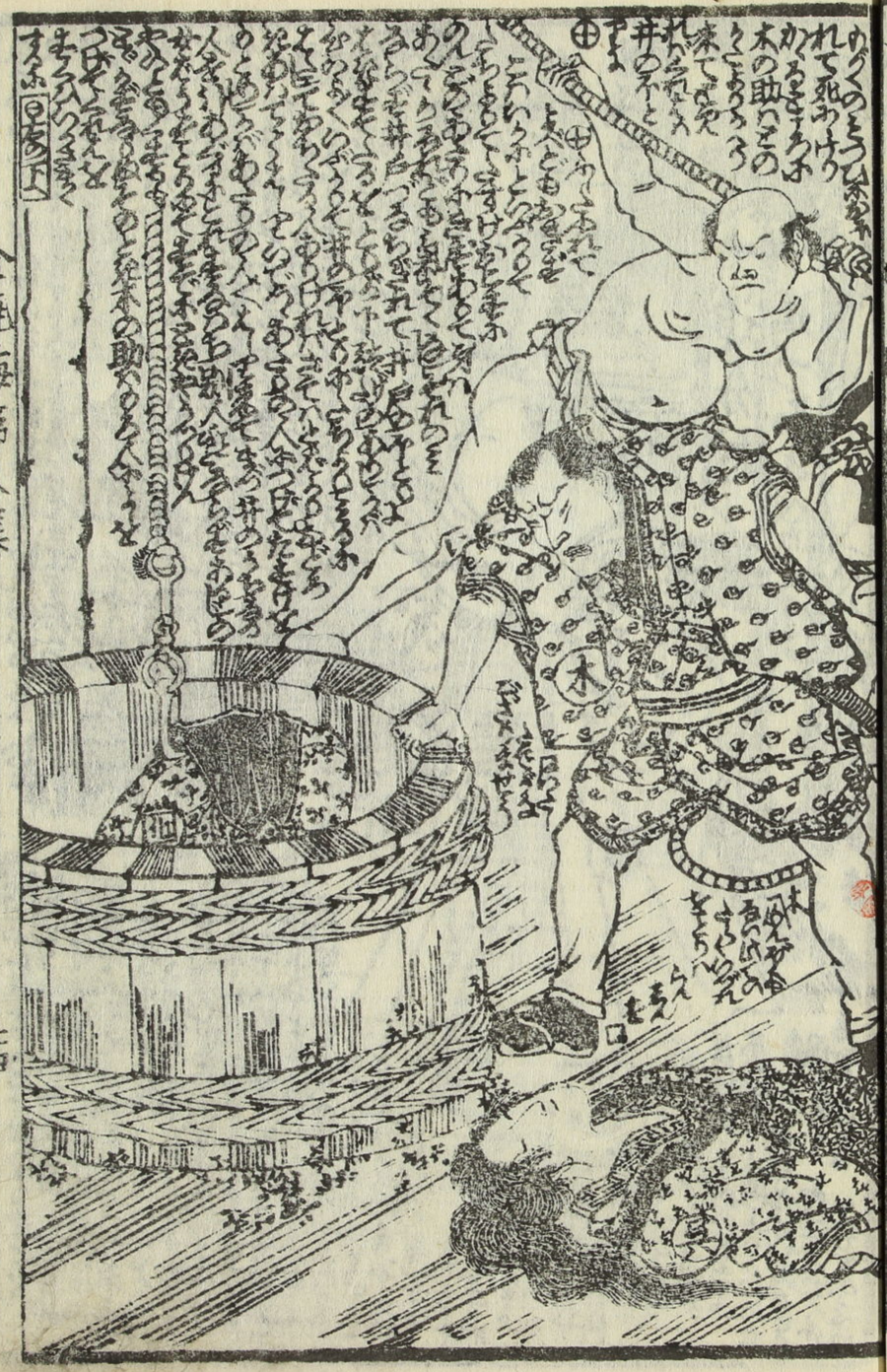
馬琴作

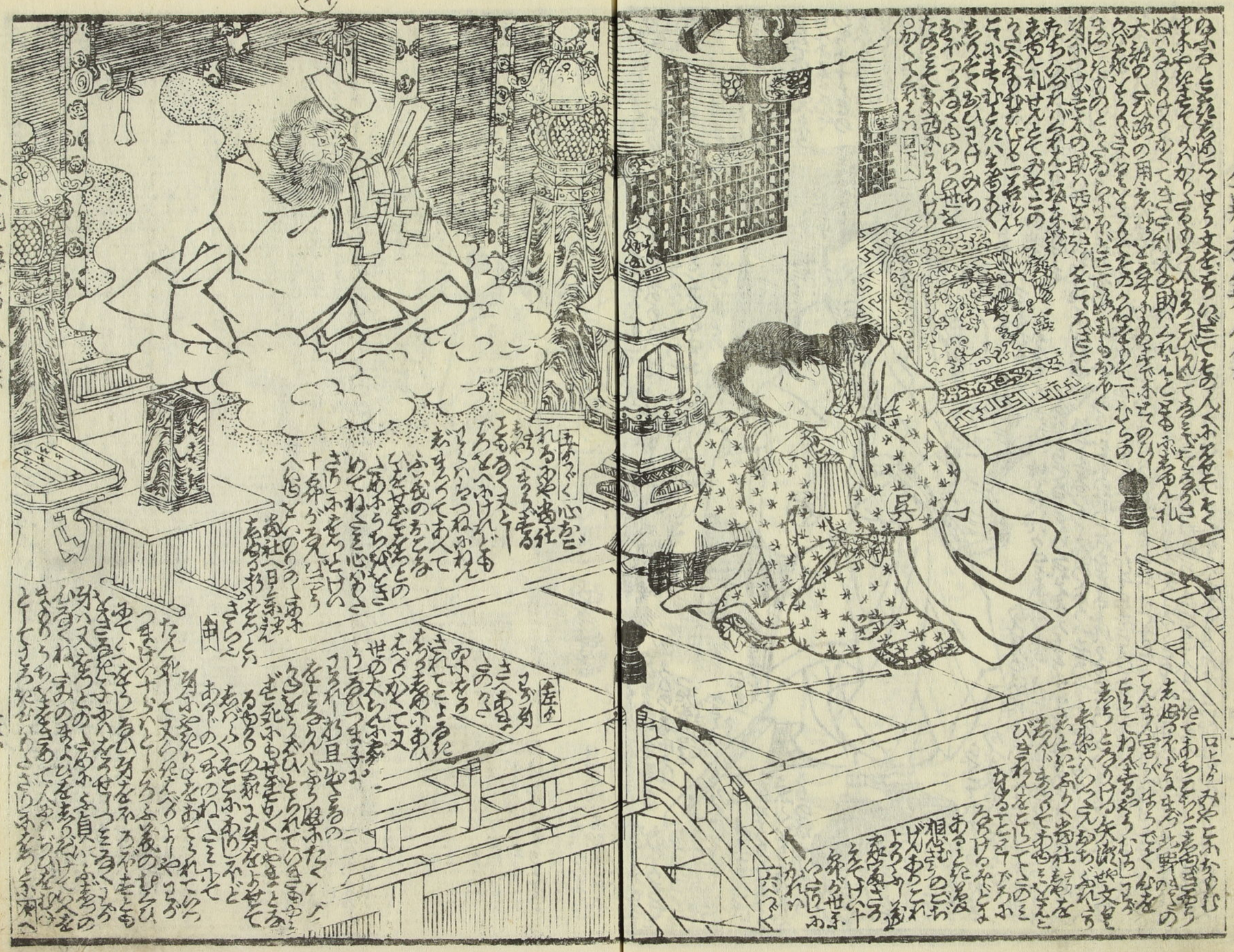
國貞画

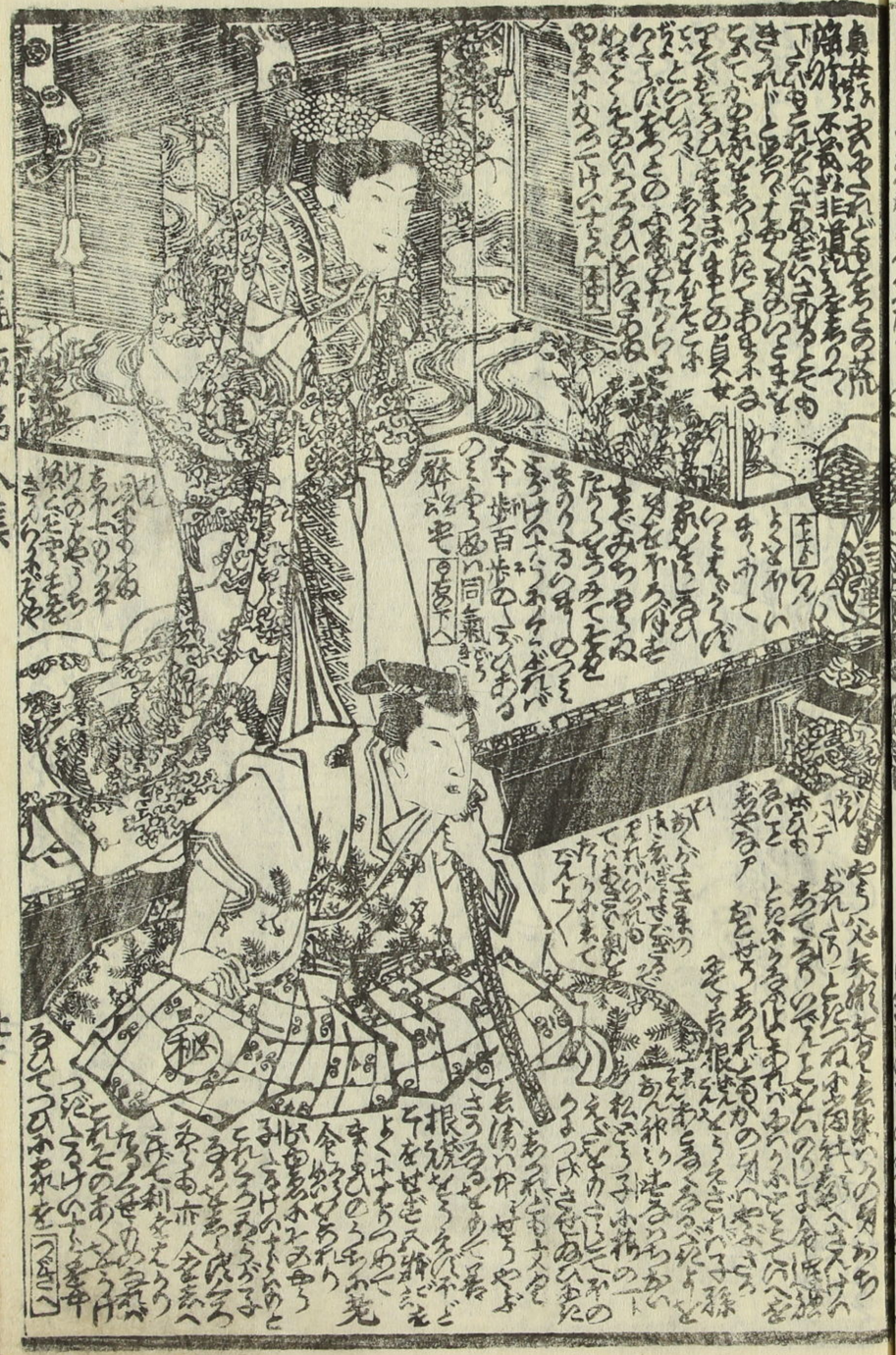
家傳神女湯
精製奇應丸
熊胆黒丸子
婦人の蟲の妙薬
製茶本家 四谷 千日谷の上 所 瀧澤氏
弘所 元飯田町中坂下南側四方の向 沢氏

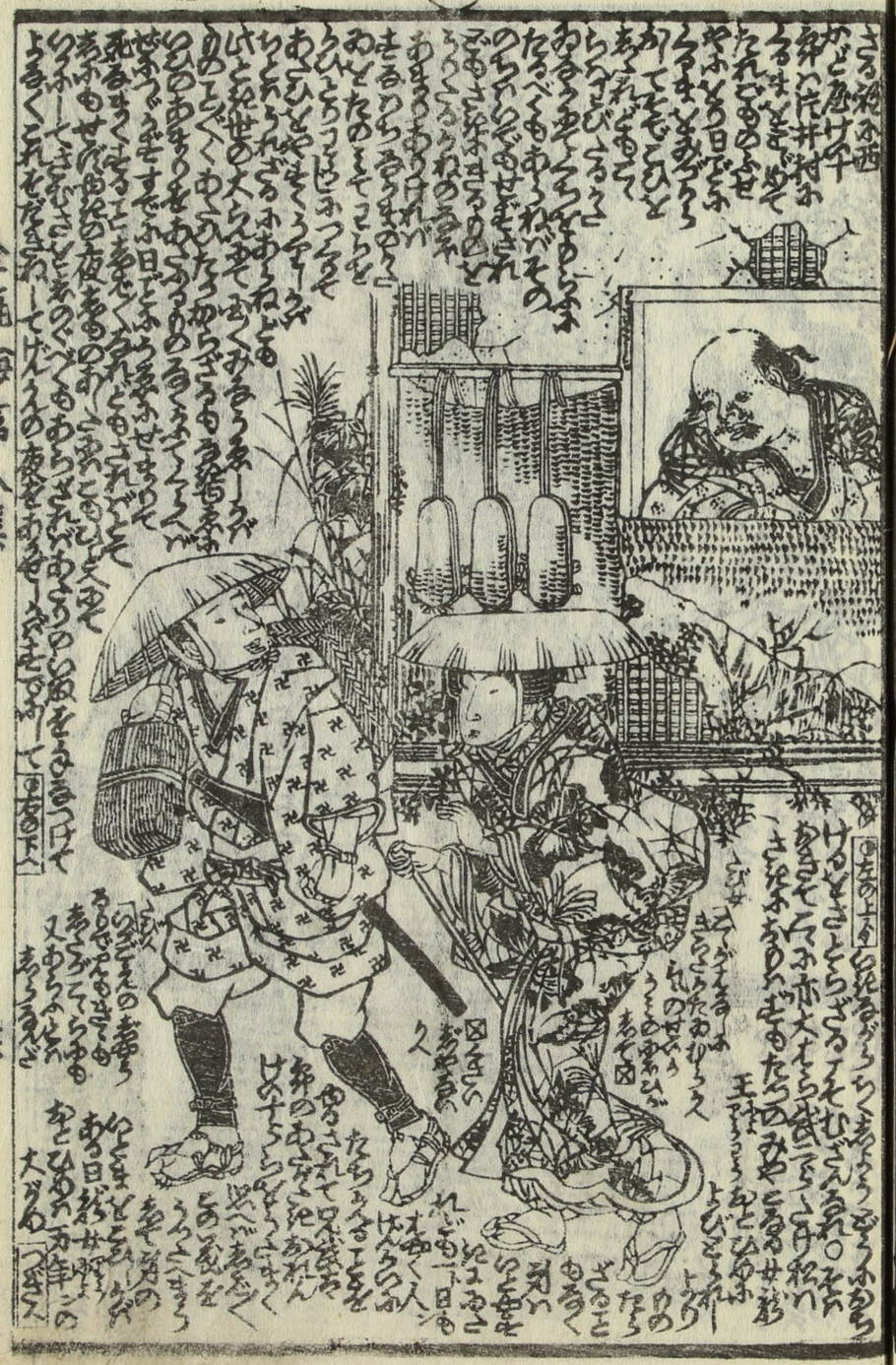


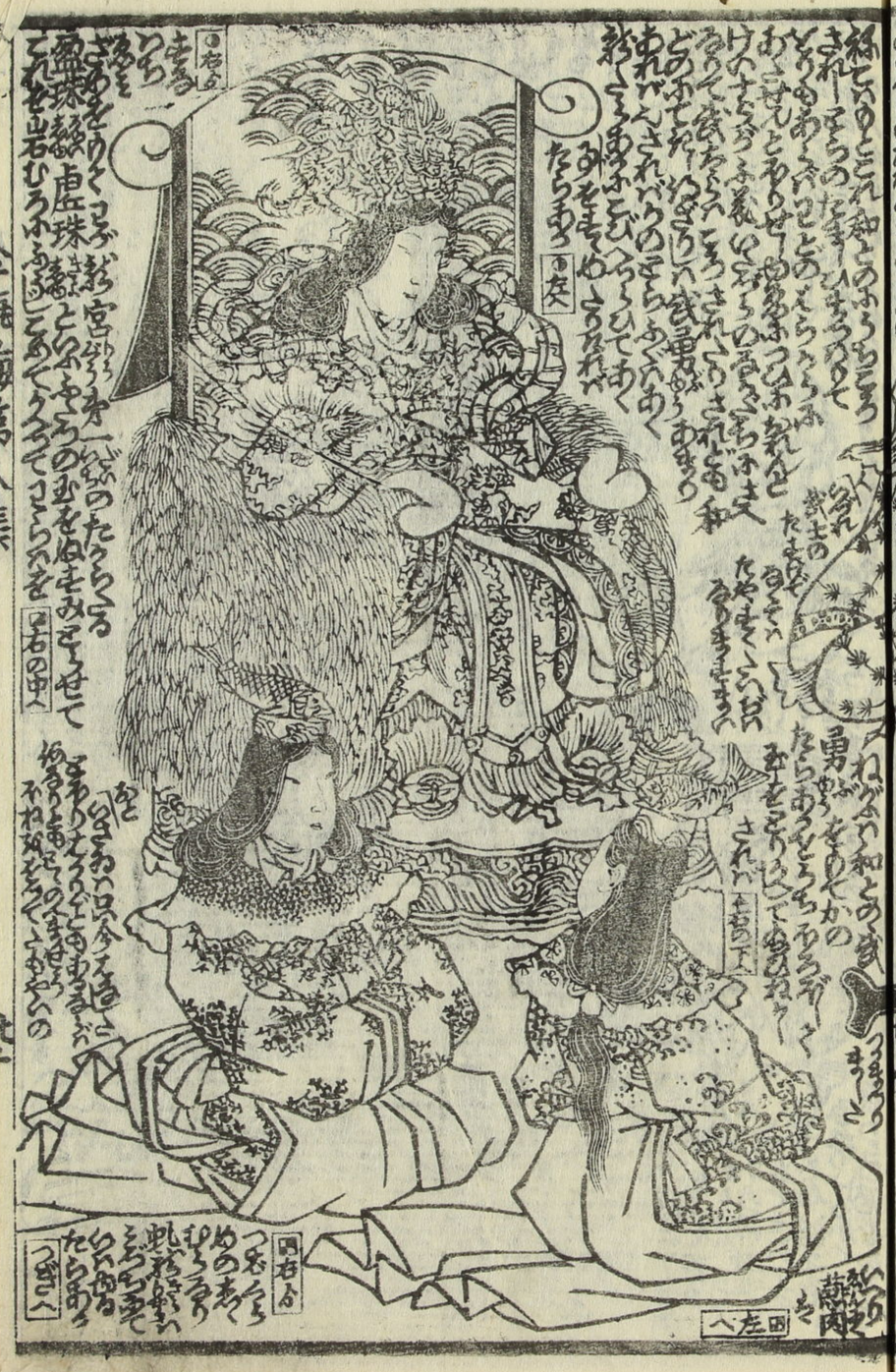












捉
亀
人魚

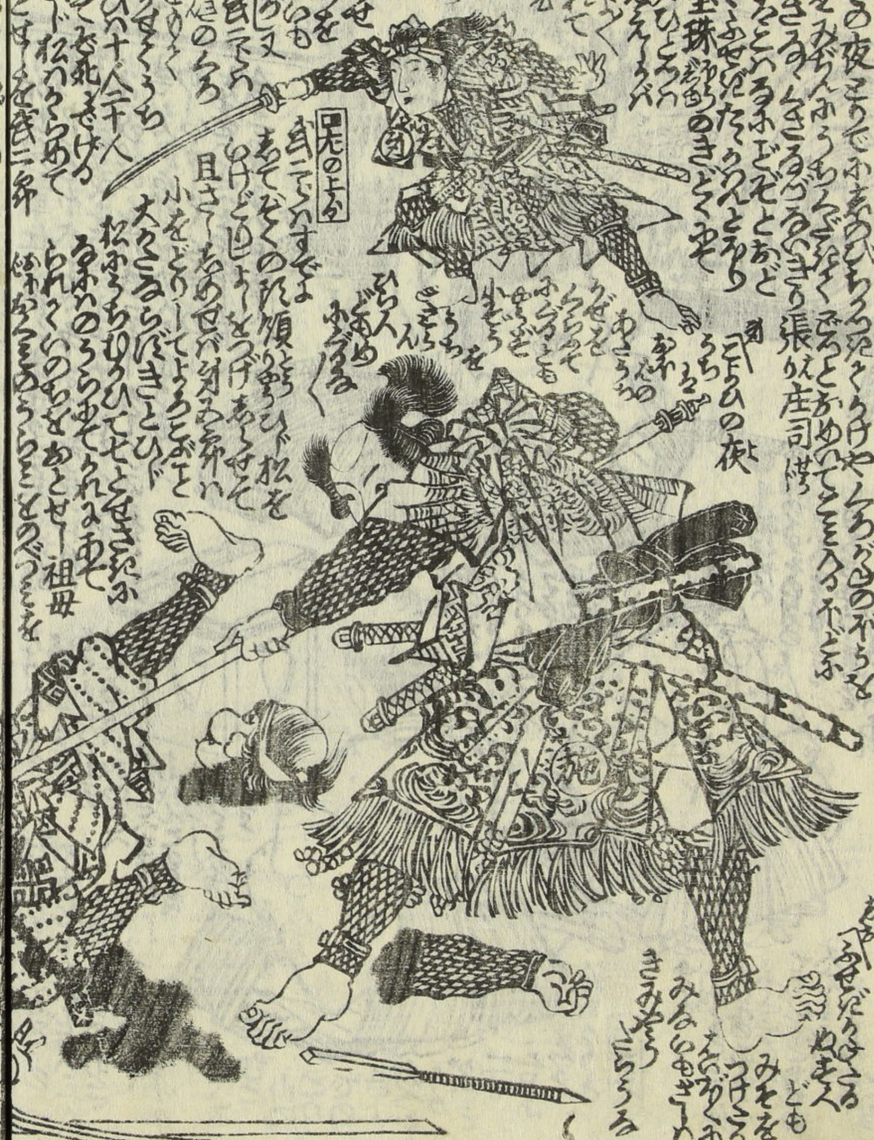
笑

鬼ヶ島
人魚と
虎
狸

海
笑

松

金



馬琴作
國貞画
清書 谷金川

湖月百人一首採庫

源氏繪尽 女今川入

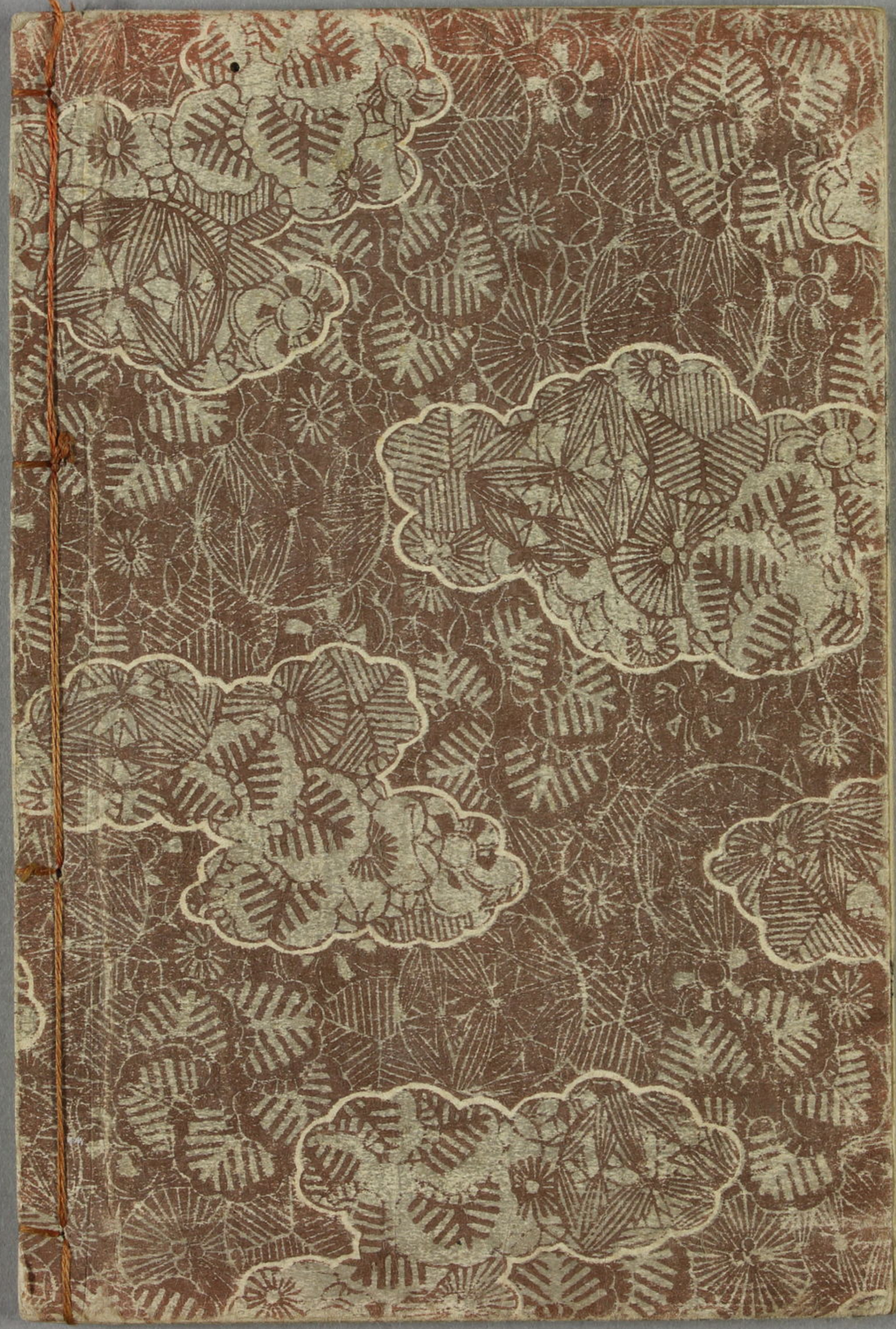
繪本名頭武者部類 前北斎筆 全

源氏繪尽 中本 全

蘭山先生著

女用玉箱 大本一冊

雛百人一首小倉錦

鶴賀新内正本所

和泉屋市兵衛